



WU International

Wakayama University Symposium Series Vol.1

和歌山大学国際シンポジウム 第1回

アジアにおける日本語教育—現状と課題—



発表要旨集



2021年3月5日(金)14:00-17:00

オンライン開催

主催：和歌山大学 研究グローバル化推進機構
グローバル化推進部 国際連携部門



国立大学法人

和歌山大学

Wakayama University Symposium Series

和歌山大学国際シンポジウム

第 1 回「アジアにおける日本語教育—現状と課題—」

要旨集 目次

国際シンポジウム ご挨拶	1
国際シンポジウム 開催主旨	2
プログラム	4
登壇者プロフィール	5
基調講演「アジアにおける日本語教育—現状と課題—」	6
事例発表	7
事例発表 1 ホーチミン市師範大学（ベトナム）	8
事例発表 2 ビヌス大学（インドネシア）	10
事例発表 3 鄭州大学（中国）	12
事例発表 4 国立世界言語大学（ウズベキスタン）	14
事例発表 5 和歌山大学（長友）	16
事例発表 6 和歌山大学（松下）	18
パネルディスカッション	20
基調講演・パネルディスカッションQ&A 回答	21
シンポジウム実施報告	26
和歌山大学国際シンポジウム 第 1 回準備委員会	27

「アジアにおける日本語教育—現状と課題—」の開催に寄せて

今、全世界を見てみると、日本語を学びたいと考える人たちが大きく増加しています。国際交流基金が出した「海外の日本語教育の現状」（2018 年）によると、2018 年時点で全世界の日本語学習者数は 385 万人余りとなっており、日本語教師数は 7 万 7 千人を上回っています。2003 年の同調査と比較すると、日本語学習者は 1.6 倍、日本語教師数は 2.3 倍に増えています。日本が果たした戦後復興と経済成長への関心から、日本と日本語へ関心は以前から寄せられていましたが、近年の海外における日本語教育の状況の変化は、その関心だけでは説明ができません。

この日本語をめぐる状況の変化は、グローバル化の進展によりもたらされたと考えられます。日本語は、日本文化とともに独特の発展を遂げてきました。このため、一部の国々あるいは研究者を除いては、日本語に目が向けられてきませんでした。しかしながら、グローバル化の進展により、古典文学からアニメーションに至る多様で奥深い日本文化が伝えられるようになりました。このようなグローバル化による日本語を取り巻く環境の変化が海外における日本語熱を高めたと考えられます。さらにこの状況の変化は、国際言語としての日本語の可能性を示唆しています。

日本国内では、従来から、国際化は英語の利用によってなされとの考えがあり、英語教育について熱い議論が繰り返されていますが、日本語教育への関心は高いとはいえない現状にあります。しかしながら、日本という国や日本文化に対する国際理解を進めていくためには、日本語教育を積極的に進めていく必要があります、そのための海外諸国への支援体制強化が必要です。特に、日本の大学は、世界の熱い期待に応え、中核的な役割を果たして行く必要があります。

和歌山大学は教育学部、経済学部、システム工学部、観光学部の 4 学部とそれぞれの大学院からなる小規模の大学ではありますが、日本語教育に関する知見を基に、継続的な留学生の受け入れと地域に住まう外国籍者の支援の実施により、日本語教育の実践経験を積んできました。和歌山大学は、この蓄積を基盤として、所在地である和歌山の持つ特徴的な歴史、文化と自然環境を活かした日本語・日本文化教育を「日本学」として展開することを決め、現在、準備を進めています。今回のシンポジウムは、その第一歩として、本学と国際連携協定を締結する諸大学の協力の下、日本語への関心が非常に高いアジアにおける日本語教育に焦点を当てて開催するものです。参加された皆様が、このシンポジウムを通じて、アジアにおける日本語教育の状況を理解し、今後の日本語教育に活用できるヒントを得ていただければと考えます。本学も海外における日本語教育の事情を学び、国際言語としての日本語の展開における和歌山大学の役割を認識させていただきたいと考えます。これを機に、本学はもちろんのこと、シンポジウムに参加されている大学、機関あるいは個人の間で、日本語教育に関する交流が促進されることを願っています。

和歌山大学 学長
伊東 千尋



国際シンポジウム 開催主旨

コロナの時代、日本語教育もさまざまな困難に直面しています。日本語教育の現状についての情報を交換し、課題を共有して、協定大学と受入大学の相互理解を深めつつ、日本語教育をさらに発展させることを目指して、このシンポジウムを企画させていただきました。

いま、日本には 30 万人を超える留学生がいます。日本で留学生が急増し、日本語教育が展開していったのは、1980 年代のことでした。その背景には、日本が驚異的な経済成長を遂げ、世界第二の経済大国となったことがあります。急増したのは留学生だけではありません。オーストラリアで「tsunami (津波)」と呼ばれるような、世界的な日本語学習ブームが起きました。

その後、日本は長期の経済停滞期に入り、世界における日本のプレゼンスは相対的に低下しましたが、日本に来る留学生は増え続け、2003 年に 10 万人を越えた留学生は、2017 年には 30 万人を越えました。また、日本語教育の学科を置く海外大学も少なくありません。ヨーロッパやその他の地域でも、日本に興味を持って日本語を学ぶ学生がいますが、圧倒的に多いのはアジアからの留学生です。アジアにおける日本語学習ニーズは、どのようなものなのでしょうか。

留学生増加の初期の時代には、正規の留学生が主で、日本語教育は留学生が日本人学生と共に学習し研究して卒業するという、アカデミックパーパスに応えるものでした。しかしその後、留学生は増加と共に多様化してゆきます。大学院などで高度な研究をする留学生も増える一方、学部レベルでは、正規の留学生の他に交換留学生や日本語日本文化研修留学生のような短期留学生が増えました。交換留学生の中にも日本語教員を目指す学生もいれば、日本文化体験をしたい学生もいます。そのような留学生の多様化は、日本語教育にも影響を与えています。日本語の教員や研究者を目指して、高度な日本語研究や日本語教育法の勉強までしたいというニーズもあれば、卒業後の就職のための日本語やビジネス日本語へのニーズもあります。一方で短期の日本文化体験に必要な程度の日本語でよいという交換留学生もいます。留学目的も日本語学習ニーズも来日時の日本語レベルも多様な留学生の日本語学習ニーズに対して、どのような授業を提供すればよいかが課題となります。

さらに、緊急の課題として新型コロナウイルスの感染があります。特に大きな影響を受けたのは交換留学生で、留学をキャンセルしなければならない学生も相次ぎました。コロナが浮かび上がらせたのは、協定大学と受入れ大学の情報や課題の共有が十分であったか、という問題です。

三つの課題があります。一つは、コロナ以前からの問題として、日本語教育のあり方について、改めて再検討するという課題です。二つめは、コロナにより学生たちの移動ができない現状を乗り越えるにはどうすればよいかという緊急の課題です。そして三つめは、やがて来るコロナ後の時代に、日本語教育を更に発展させてゆくにはどうすればよいかという課題です。

今回のシンポジウムで、before コロナ、with コロナ、post コロナの日本語教育のあり方を、アジアにおける協定大学の先生方と共に話し合い、日本語教育の未来を見通すことができればと願っています。

和歌山大学 国際連携部門 副部門長
日本語教育・国際理解教育担当教授
長友 文子





WU International WU International 主催



Wakayama University Symposium Series Vol.1

アジアにおける日本語教育 ー現状と課題ー

和歌山大学グローバル化推進部では、アジア諸国における日本語教育の現状と課題を共有し、相互理解を深め、日本語・日本文化の教育及び研究を共に発展させることを目指し、シンポジウムを開催します。
国内外の日本語教師による事例発表、パネル・ディスカッションを通じ、オンラインと対面を合わせたポストコロナ時代のハイブリッド型授業等の新たな教育法の確立を模索します。

総合司会
藤山 一郎
和歌山大学 国際連携部門 准教授

来賓挨拶

アジズ アブドゥハキモフ

ウズベキスタン共和国 副首相
シルクロード国際観光大学 学長

基調講演

伊東 祐郎

公立大学法人 国際教養大学
グローバル・コミュニケーション実践研究科 (大学院)
日本語教育実践領域 教授

事例発表・パネルディスカッション

ブイフンギーリン (ホーチミン市師範大学 日本語学部 副学部長)
ウタリノベラ 他 (ビスマス大学 人文学部 日本語学科 講師)
段 帆 (鄭州大学 日本語学科 准教授)
イブラギモヴァマリカ (ウズベキスタン国立世界言語大学 日本語学科 上級教師)
長友 文子 (和歌山大学 国際連携部門 教授)
モデレーター: 松下恵子 (和歌山大学 国際連携部門 特任助教)

総括

長友 文子

和歌山大学 国際連携部門 教授

2021年3月5日(金)

14:00~17:00

Zoom
開催

参加
無料

定員
500名

1992年4月から東京外国語大学留学生日本語教育センター勤務。
2011年、同センター長。公益社団法人日本語教育学会会長等を
務め、2017年4月から2019年3月まで東京外国語大学副学長(国
際交流等担当)兼附属図書館長。同年4月から現職。
日本語教育学会の理念「日本語教育が人をつなぎ、社会をつく
る」をめざし、日本語教育推進関係者会議委員他、文化庁日本
語教育施策に従事している。



国際教養大学 教授
ITO Sukero 伊東 祐郎

1994年4月、和歌山大学に赴任。2006年国際教育研究センター
長。2018年から国際連携部門副部門長を務める。
留学生の日本語、日本文化、国際理解教育や、日本人学生の日
本語教育学を担当。
また、和歌山県国際交流協会理事を務め地域の在住外国人・外
国人児童生徒の支援に関わっている。



和歌山大学 教授
NAGATOMO Ayako 長友 文子



ベトナム
ホーチミン市師範大学
日本語学部
副学部長
ブイフンギーリン



インドネシア
ビスマス大学
人文学部 日本語学科
講師
ウタリノベラ



中国
鄭州大学
日本語学科
准教授
段 帆



ウズベキスタン
国立世界言語大学
日本語学科
上級教師
イブラギモヴァマリカ

お申込み方法

右記QRコードより登録フォームに必要事項を入力の上、
お申し込みください。
和歌山大学国際連携部門 (IRD) HPからも、
登録フォームにアクセスできます。
IRDウェブサイト: <https://www.wakayama-u.ac.jp/ird/>



お問い合わせ



国立大学法人 和歌山大学 研究グローバル化推進機構
グローバル化推進部 国際連携部門
Tel : 073-457-7524
Mail : kokusai@ml.wakayama-u.ac.jp

WU International

プログラム

14:00-14:15

■ 開会宣言

[総司会] 藤山 一郎 和歌山大学国際連携部門 准教授

■ 開会挨拶

伊東 千尋 和歌山大学長

■ 来賓挨拶

アジズ アブドゥハキーモフ

シルクロード国際観光大学長・ウズベキスタン共和国副首相

14:15-14:45

■ 基調講演「アジアにおける日本語教育—現状と課題—」

伊東 祐郎 国際教養大学 教授

14:45-16:05

■ 5 大学事例発表（ビデオによる発表）

事例1：ホーチミン市師範大学（ベトナム）

事例2：ビヌス大学（インドネシア）

事例3：鄭州大学（中国）

事例4：国立世界言語大学（ウズベキスタン）

事例5：和歌山大学（長友）

事例6：和歌山大学（松下）

16:15-16:45

■ パネルディスカッション

「5 大学における日本語教育—現状と課題—」

[パネリスト]

ブイ フン ギー リン（ホーチミン市師範大学日本語学部 副学部長）

ウタリ ノベラ（ビヌス大学人文学部日本語学科 講師）

段 帆（鄭州大学日本語学科 准教授）

イブラギモヴァ マリカ（国立世界言語大学日本語学科 上級講師）

長友 文子（和歌山大学国際連携部門 教授）

[モデレーター]

松下 恵子（和歌山大学国際連携部門 特任助教）

16:45-17:00

■ 総括

長友 文子 和歌山大学国際連携部門 教授


■ 閉会挨拶

クパニ ルンビディ 和歌山大学副学長

■ 閉会宣言

登壇者プロフィール

基調講演

	<p>伊東 祐郎 公立大学法人 国際教養大学 グローバル・コミュニケーション実践研究科（大学院） 日本語教育実践領域 教授</p> <p>1992 年 4 月から東京外国語大学留学生日本語教育センター勤務。2011 年、同センター長。公益社団法人日本語教育学会会長等を務め、2017 年 4 月から 2019 年 3 月まで東京外国語大学副学長（国際交流等担当）兼附属図書館長。同年 4 月から現職。日本語教育学会の理念「日本語教育が人をつなぎ、社会をつくる」をめざし、日本語教育推進関係者会議委員他、文化庁日本語教育施策に従事している。</p>
---	--

事例発表・パネルディスカッション

	<p>ブイ フン ギー リン ホーチミン市師範大学／ベトナム 日本語学部 副学部長</p> <p>2010 年大阪大学日本語・日本文化専攻博士前期課程修了。2012 年よりホーチミン市師範大学日本語学部勤務。学生の活動性とコミュニケーション能力の向上を目的として、アクティブラーニングなどを取り入れた実践を行っている。</p>
	<p>ウタリ ノベラ ビナ ヌサンタラ（ビヌス）大学／インドネシア 人文学部 日本語学科 講師</p> <p>2019 年名古屋大学文学研究科博士後期課程修了。2019 年 5 月、ビヌス大学に赴任。専門は言語学で、インドネシア語・日本語の副詞に関する対照研究や言語コーパスなどの研究を行っている。また、複数の国際共同研究プログラムを担当している。</p>
	<p>段 帆 鄭州大学／中国 日本語学科 准教授</p> <p>北京外国語大学（日本学研究センター）修士、日本語教育専攻。教師行動、教室活動、教授法、第二言語習得などの研究を行っている。</p>
	<p>イブラギモヴァ マリカ 国立世界言語大学／ウズベキスタン 日本語学科 上級教師</p> <p>タシケント国立東洋学大学、ウズベキスタン日本人材開発センターなどを経て 2014 年よりウズベキスタン国立世界言語大学日本語学科勤務。2015 年から 2018 年まで東洋講座長、2019 年から 2020 年まで日本語講座長を歴任。通訳・翻訳活動も行っている。</p>
	<p>長友 文子 和歌山大学 国際連携部門 副部門長 日本語教育・国際理解教育担当 教授</p> <p>1994 年 4 月、和歌山大学に赴任。2006 年国際教育研究センター長。2018 年から国際連携部門副部門長を務める。留学生の日本語、日本文化、国際理解教育や、日本人学生の日本語教育学を担当。また、和歌山県国際交流協会理事を務め、地域の在住外国人・外国人児童生徒の支援に関わっている。</p>
	<p>松下 恵子 和歌山大学 国際連携部門 日本語教育担当 特任助教</p> <p>2020 年 4 月、和歌山大学に赴任。留学生の日本語・日本文化教育を担当。また、地域在住外国人への支援に関わっている。</p>

アジアにおける日本語教育事情－現状と課題－

伊東 祐郎

国際教養大学専門職大学院

国境を越えた大学間学術協定の締結や学生交流企画の増加によって、留学生が日本の大学で日本語や日本文化などを学ぶ機会が多くなった。また、日本語・日本文化の領域を超えて、専門に特化した学部や大学院等に編入あるいは進学して学ぶ留学生も増えてきた。日本の大学が留学生を積極的に受け入れるための体制作りとして、日本語プログラムの充実に向けてのコース増設や、魅力ある科目の開設に取り組んでいる。受入の形態も、ダブル・ディグリーという学位取得のものから、短期留学での単位取得を目的とするものまで様々である。しかしながら、留学生の受入、特に多様な日本語能力を有する学生への対応については、必ずしも円滑に進められているとは限らない。出身国での日本語学習歴や学習者個人の学習ニーズも様々であるために、世界各地からやってくる留学生を一堂に集めて体系的にしかも効率よく日本語教育を実践していくためには、解決すべき課題が少なからず存在する。

上述の諸課題を解決するためには、送り出し側である協定校は、受け入れ側の教育プログラムを事前に調査して、学生の日本語学習の充実に努め、一方で留学を終え帰国した学生が効率よく日本語学習が継続できるよう対応する必要がある。また、事前事後の個々の学生へのカウンセリングも必要となろう。そのためには、やはり日本の受け入れ大学の取り組みが鍵となる。協定校の日本語プログラムや学習内容、その成果等に配慮し、あわせて、協定校に対しては、授業科目に関する詳しい情報、特に教育目標とそれを達成するための学習活動や教材等の情報を開示しわかりやすくしておくことが求められる。詳細なコース概要がオンラインで提供されていれば、単位互換の判断もかなり容易になる。

日本語学習の接続・連続性を確立するためには、学習の成果である言語習得 (outcomes) の観点から言語能力を検討することも大切になる。これまでは伝統的に、日本語能力試験の出題基準や、それに基づいて作成された教科書の教授項目という枠にとらわれて指導が行われていた。言語習得は必ずしも学習項目の指導順序通りに行われるものではない。言語運用力は、言語が使用される文脈や環境、また使用目的に応じて、高い必然性があって獲得されていくものである。言語習得の漸増性や連続性を具体的な運用面から記述することによって、教師にとっての教育目標、学生にとっての学習目標が明確になり、教育内容と学習内容の透明性が確保されることになる。ひいては、テスト内容や方法の改善にもつながり、教育目標との一貫性や整合性の確保が実現できる。そして、協定校向けのプログラムで学ぶ学生の習得度や学習の目安を共有することが容易になり、帰国後の日本語力の診断等にも活かすことができる。結果的に、送り出し大学の日本語プログラムとの接続の実現にもつながるのではないだろうか。

事例発表 (ビデオによる発表)

日時：2021 年 3 月 5 日 (金) 14 : 45-16 : 05

事例発表 1 約 15 分

ブイ フン ギー リン
ホーチミン市師範大学／ベトナム

Case Study 1 :

Bui Phung Nghi Linh
Ho Chi Minh city University, Vietnam

事例発表 2 約 15 分

ウタリ ノベラ
ダニアル アスマラニ
ヘンディ レギナルド チュアチャ ダルマ
ダニエル ヘルマワン
ビナ ヌサンタラ (ビヌス) 大学

Case Study 2 :

Utari Novella
Dhaniar Asmarani
Hendy Reginald Cuaca Dharma
Daniel Hermawan
Bina Nusantara (BINUS) University, Indonesia

事例発表 3 約 15 分

段 帆
鄭州大学／中国

Case Study 3 :

Duan Fan
Zhengzhou University, China

事例発表 4 約 15 分

イブラギモヴァ マリカ
ウズベキスタン国立世界言語大学

Case Study 4 :

Ibragimova Malika
Uzbek State World Languages University, Uzbekistan

事例発表 5 約 15 分

長友 文子
和歌山大学／日本

Case Study 5 :

NAGATOMO Ayako
Wakayama University, Japan

事例発表 6 約 05 分

松下 恵子
和歌山大学／日本

Case Study 6 :

MATSUSHITA Keiko
Wakayama University, Japan

※大会当日のみ、事例発表動画を YouTube でもご覧いただけます。

コロナ禍における日本語会話のオンライン授業 —ホーチミン市師範大学の経験—

ブイ フン ギー リン (ホーチミン市師範大学／ベトナム)

1. 発表の背景・目的

ベトナムにおける新型コロナウイルスの流行により、2020年3月13日から、国立ホーチミン市師範大学日本語学部は、700人以上の学生のために12人の講師が61のオンラインクラスを開講した。二か月の短い時間で開講されたものの、オンラインクラスを使用して日本語の読解・聴解・会話・作文授業を行うことの利点と問題点を発見しながらいくつかの対策を実施した。さらに、2021年2月からホーチミン市師範大学におけるオンラインクラスが再度開講されることになったため、オンラインクラスの効果的な使用方法を開発する必要性がさらに高くなった。

この報告においては、オンラインクラスを開講する際の日本語授業、特に会話授業を行う際の利点と課題点を紹介したい。オンラインクラスは、パンデミックで不安定な社会で教師と生徒をつなぐのに非常に役立つことが証明されている。また、講師の教授法や学生の知識への取り組み方を変える機会にもなった。しかし、これらのクラスは、教師と学習者の両方に大きな課題をもたらした。しかし、学生は学習のプロセスや講義の内容についていくのに多くの困難に直面し始めたことも事実である。特に会話授業でのコミュニケーションが不足したため、教室の目的は達成されない危険があった。次に、上記の問題を解決するためのいくつかの参考手段を提供する。最後に、オンラインクラスの会話授業準備のためにいくつかの注意点について述べたい。

2. 発表の概要

発表内容については、主に以下の点について紹介する。

1. コロナ禍のオンライン会話授業の開講
2. オンライン教室の利点と問題点
3. オンライン会話授業に関するいくつかの参考手段と来学期の準備

3. まとめ

新型コロナウイルスのパンデミックにより、ベトナムの学校は伝統的なクラスからオンラインクラスに変更されたが、それ以前は、オンラインで教えた経験のある学校はほとんどなかったため、新しい状況に適応するためにカリキュラムと教授法をすばやく調整する必要があった。

オンラインクラスは、講師や学生が教育や学習でICTを使用する方法について学ぶ多くの機会を提供してきた。しかし、オンラインクラスは、講師と学生にとって様々な問題もあった。教師

はこの新しい教育方法に適応する方法を見つける必要がある。最も重要なことは、学生を精神的に世話し、問題を克服するのを助けるために、教師側が学生とつながるように努める必要がある。オンライン会話授業の場合、様々な提示パフォーマンスのタスクを行う機会が多く、会話タスクを通じて、インターネットを効果的に使用するコミュニケーション方法を学習者に教えることもできる。しかしながら、オンラインクラスにおける対話練習、グループディスカッションなどのグループ活動はさらに工夫が必要となる。

問題の解決として、教授法の変更、オンライン授業に合わせた学習計画の調整、評価方法の整理など、さまざまな行動を行う必要があると思われる。さらに、教師は教育において ICT を効果的に使用することを学ぶ必要もある。

状況が不安定な現在では、オンラインクラスは近い将来、教育と学習を維持するための主要な解決策になる可能性が高い。したがって、講師は障害に屈してはならず、ただ座ってすべてが戻るまで待つこともできない。質の高いオンラインクラスを提供するために困難を克服する方法を見つける必要があるだろう。

[参考文献]

- 国際文化フォーラム（2016）『外国語学習のめやす 2012-高等学校の中国語と韓国語教育からの提言』PDF 版, 国際文化フォーラム（TJF）. https://www.tjf.or.jp/meyasu/common_pr/02meyasu2012_final.pdf（参照 2021-02-10）
- 宮原彬（2018）『留学生のための時代を読み解く上級日本語（第3版）』スリーエーネットワーク.
- 山田智久（2017）『ICT の活用 第2版』日本語教師のための TIPS77②, くろしお出版.

ビヌス大学における日本語のオンライン授業 —現状と課題—

ウタリ ノベラ、ダニアル アスマラニ
ヘンディ レギナルド チュアチャ ダルマ、ダニエル ヘルマワン
(ビナ ヌサンタラ〈ビヌス〉大学／インドネシア)

1. 発表の背景・目的

COVID-19によるパンデミックは、生活における様々な場面に大きな変化をもたらした。その中でも教育は、最も大きな影響を受けた分野といえるだろう。パンデミック以来、全ての授業がオンライン式でおこなれ、教室と呼ばれた教育の場が変容した。現在のように学校教育でおこなわれるべき教育がオンラインのみで行われるのは、誰もが初めての経験であることには間違いない。

インドネシアは2020年3月に、ジャカルタで初めてのコロナウイルス感染症が発生した。そのとき以来、ありとあらゆる活動が一時的に中止された。これまでの生活が、できる限りオンライン化され学校現場においても、教師は在宅勤務（WFO / Work From Home）となり、オンライン授業を始めた。現在には感染者数が減少した地域においては、対面授業を再開する学校が少なくないが、ジャカルタ市内にある本大学では、未だオンライン授業を継続している。

ビヌス大学は7つの学部、30の専攻に分かれている。日本語学科は、文学部である。現在、ビヌス大学の日本語学科は1年生から4年生まで300名ほど在籍している。オンライン授業による影響は、大学教育全般に大きな影響を与えた。当初、オンライン授業を効果的に進められるようあらゆる方法を試みた。授業が円滑におこなえるよう、学生も協力してくれた。しかしながら、言語習得を目指す日本語学科の多くの科目を、完全にオンラインで教えることや学生自身が学習することは、簡単なものではなかった。オンラインでは、学生がどの程度理解できたのかが図りにくく、また講師としても、目標を達成できているのかが分かりづらかった。わたしたちは、オンライン授業における教授方法を改めて考え直さなければならなかった。

本研究は、ビヌス大学において初級レベルの日本語授業（文法1、会話1、聴解1、読解1）についての現状と課題を記述する。研究の目的は、オンライン授業後に見えてきた講師や学生の課題は何か、またどのような授業をすることで、言語習得につながるのか、である。

2. 発表の概要

ビヌス大学の日本語学科の一年生は2つクラスあり、一クラスは45人程度である。多くの学生は入学してからはじめて日本語を学習している。そのため日本語の能力は、N5以下である。中には、N4の資格を持つ学生も数人いる。オンライン授業は、主に大学側から提供されているZoomを使用している。また宿題の提出、授業資料と振り返りはビヌスマヤ（BINUSMAYA）という学校が使ったアプリを使用して行われている。授業でつまづいたり分からなかったりする時は、講師が作成したLINEグループで、いつでも質問する環境を作っている。講師と学生がLINEを通じて

ディスカッションすることができるのである。授業の評価は、グーグルフォーム (Google Form)、クイズイズ (Quizizz)、パッドレット (Padlet) などを使用している。

4 つの科目のオンライン授業においてさまざまな方法があり、科目によって異なった方法も見られる。例えば、反転授業、シャドーイング、ドリル、ジグソー読書などである (それぞれの教授方法においては、発表中に説明する)。

科目によってオンライン授業の課題は、さまざまである。例えば、ある講師は、学生へのフィードバックを毎週あげるのが難しいと感じていた。それは、一クラスの人数に原因があると考えている。また聴解や会話の授業では、学生自身がアウトプットを繰り返し行い、何度も反復練習をしなくてはならない。しかし、オンライン授業になってから、人数が多い上に、限られた環境と時間の中で反復練習を行わざるをえず、以前のような効果的な授業ができなくなってしまった。オンライン上で、講師が一人ひとりの学生の演習が正確であるか否かを確認するのが難しいからである。読解のオンライン授業においては、読みの理解が必要不可欠である。この場合もやはり人数が多いので、全員の学生の読み練習ができなくなってしまっている。その為、講師は、学生がどの程度理解できるのかが確認できないのである。

一方でオンライン授業の良い点もたくさんある。その一つとして、講師と学生がより創造的に考え、主体的な活動を生み出すという事である。講師側は、授業が一辺倒で退屈な時間にならないように、クイズやゲーム形式を取り入れた授業を考案した。学生は、より主体的に活動しなければならなくなった。オンライン授業は、対面授業に比べると時間的・環境的に限定されてしまうので、以前より多くの自習時間が生まれた。そのため、学生自身は自ら課題を見つけ、自分に必要な学習を創造しようと、考え行動するようになる。

3. まとめ

現在パンデミックの状況下でオンライン授業が唯一の方法である。オンライン授業を通して、講師も学生もそれぞれに新たに必要とされる力が明らかになった。ビヌス大学の初級レベル日本語科目 (文法 1、会話 1、聴解 1、読解 1) は、オンラインであっても、授業の質を高め、講師も学生も満足のいくものを追求し続けるからこそ、その価値を保つことができている。今後も、様々な困難や課題を克服し、乗り越えるために、授業改善に全力を注いでいきたい。

[参考文献]

Herreid, C. F., & Schiller, N. A. (2013). Case Studies and the Flipped Classroom. *Journal of College Science Teaching*, Vol. 42, No. 5.

Karlsson, G., & Janson, S. (2016). *The Flipped classroom: a model for active student learning*. Sweden: Portland Press Limited.

松浦真理子ほか (2018) 『まねして上達！ にほんご音読トレーニング』 アスク出版.

Ozdamli, F., & Asiksoy, G. (2016). Flipped classroom approach. *World Journal on Educational Technology: Current Issues*, Vol 8, Issue 2, 98-105.

戸田貴子編著 (2012) 『シャドーイングで日本語発音レッスン』 スリーエーネットワーク.

中国における日本語教育の現状と課題 —鄭州大学を中心に—

段 帆（鄭州大学／中国）

1. 発表の背景

- ・日本国際交流基金の調査（2018）によると、中国の日本語学習者数と教師数はともに世界一であるという。
- ・新中国成立以来、日本語教育は三つの発展期を経て、第三発展期（1999-2017 年）に入ってから、日本語教育機構が急増し、日本語学科が設置された大学は既に 500 箇所以上出ており、中国における日本語学習者の 6 割以上を擁している。
- ・時代の発展につれ、2012 年以来、中国は新たな転換期を迎え、それに伴い、中国の日本語教育も新たな段階に入り、多種なる新しい挑戦に直面している。それに対応して、2020 年に日本語教学ガイドラインが中国教育部によって公布された。
- ・新型コロナウイルスの流行により、日本語の授業は対面よりオンラインに変更させられ、それにより授業革命についての思考と実践も進められている。

2. 発表の目的

- ・本学の日本語教育の現状を踏まえ、存在している問題を反省する。
- ・世界グローバル化が進む中で、中国の新時代に向けて、本学の日本語学科の更なる発展を図るための課題を検討する。

3. 発表の概要

1) 鄭州大学日本語学科の概況

- ・鄭州大学が中国における位置づけ
- ・鄭州大学日本語科の歴史と発展
 - ・学科設立期
 - ・規模拡大期
 - ・学科構築期
 - ・特色発展期
- ・在籍教師数
- ・卒業生と在校生

2) 鄭州大学における日本語教育の現状

- ・本学科の教育目標
- ・従来の取り組み

- ・日本語カリキュラム
- ・コロナでの取り組み
- ・日本語実践活動
- ・近年来の教育成果

3) 人材養成における問題点

- ・学生側にある問題点
- ・教師側にある問題点
- ・学校側にある問題点

4) 今後の課題

- ・日本語教育が直面する新しい挑戦
- ・人材養成に関わるキーワード
- ・人材養成の対応策

4. まとめ

中国の日本語教育は急速成長期を経て、世界において、日本語教育機関数、学習者数、教師数が最も多い国となっている。国内では中国の発展の新時代を迎え、国外では世界のグローバル化が進む中で、どうやって時代発展の需要に対応できる人材を養成するかは、日本語教育が直面すべき課題となっている。人材養成を日本語教育のキーワードとして、日本語教育の現状を踏まえ、従来の問題点を反省し、人材養成の能力、目標、手段、協働をめぐり検討していくことは、時代の要求だけでなく、日本語学科の生存と発展にも関わっている。本学は人材養成の主体である教師の専門性の向上、人材養成を目指すカリキュラム改革への推進、人材養成の手段としての課程改革、人材養成のためになる協働システムの構築、人材養成の国際化の推進などに取り組み、本学の個性化・特色化を図ろうと試みたい。

[参考文献]

- 国際交流基金 “2018 年度海外日本語教育機関調査結果（速報値）”，プレスリリース，公開日時 2019-10-18, <https://www.jpf.go.jp/j/about/press/2019/dl/2019-029-02.pdf>（参照 2021-02-10）
- 修 剛（2008）「中国高等学校日语教育的現状与展望」『日語学習与研究』138(5), pp.1-5.
- 修 剛（2011）「転型期的中国高校日語專業教育的幾点思考」『日語学習与研究』(4), pp.1-6.
- 修 剛 “「日本語教学ガイドライン」についての解説” 「中国の大学での日本語教育に関するフォーラム、オンラインで開催」北京：新華社配信，公開日時 2020-05-14, http://jp.xinhuanet.com/2020-05/14/c_139055487_2.htm（参照 2021-02-10）
- 宿久高（2003）「中国日語專業的現状与未来」『日語学習与研究』(2), pp.50-53.

ウズベキスタンにおける日本語教育事情・課題 —大学教育における問題点—

イブラギモヴァ マリカ（国立世界言語大学／ウズベキスタン）

1. 発表の背景・目的

本発表の目的は現在のウズベキスタンにおける日本語教育の実態及び課題を明らかにすることです。

2. 発表の概要

ウズベキスタンの日本語教育はソ連崩壊の時期、1990年にウズベキスタンが独立する直前に始まりました。その時、日本語教育がおこなわれた機関は唯一、タシケント国立東洋学大学のみでしたが、今は3つの大学で日本語・日本文学等の専門教育がおこなわれ、5つの大学で第2外国語として日本語が教えられています。中等教育では2つの高校（タシケント国立東洋学大学附属リツェー、サマルカンド外国語大学附属リツェー）で日本語教育がおこなわれ、最近ではタシケントの2つの中学校でも導入されています。その他に2000年に設立されたウズベキスタン日本センターを始め多くの民間語学センターで誰もが日本語を勉強できます。日本語教育開始直後の1990年に日本語学習者数は15名以下でしたが、現在は2800名ぐらいです。

1999年にウズベキスタン日本語教師会が創立され、2021年には17の教育機関から71名が参加しています。会員になっていない、タシケントあるいは地方の民間語学センター、人材送り出し機関で日本語を教える教員がいますので日本語教育機関の数、教師数はもっと多いはずです。

ウズベキスタン日本語教師会に参加している殆どの機関は毎年、機関内の日本語弁論大会を実施し、次の段階としてウズベキスタン日本語弁論大会、中央アジア日本語弁論大会、CIS諸国の学生が集まるモスクワ国際学生日本語弁論大会に参加しています。2020年、第28回ウズベキスタン日本語弁論大会が行われましたが、新型コロナウイルスのパンデミックにより中央アジア日本語弁論大会は中止になりました。2019年3月にキルギスで第23回中央アジア日本語弁論大会がありました。

ウズベキスタン日本語教師会は日本語弁論大会以外には国際交流基金の助成を得たうえで日本語教育セミナーなどを主催しています。

日本語教育がウズベキスタンで開始された当初は日本語を勉強する動機は日本の大学への留学などでしたが、最近は労働力が不足している日本へ働きに行くことのほうに重点が置かれています。本年は日本語・特定技能試験準備センターが設立され、ウズベキスタン全国に分校を作ることになっています。

すでに存在していたウズベキスタンの日本語教育における日本語教師不足の問題がこれからさらに拡大します。なぜ 1991 年から日本語の専門教育が始まっているのに日本語教師が不足しているのでしょうか。日本語教育の核となっている大学もウズベキスタンの高等教育機関が等しく抱える多くの問題に、同じように直面しているからです。

ウズベキスタン高等中等専門教育省は高等教育を発展させるために国際的な経験を取り入れ、単位制度などを導入しています。しかし大学の教員には担当する授業時間数が多すぎる、授業以外の業務の負担が大きいなどの問題があり、そのために退職するケースが多いです。さらに日本語教育に関連しては、以下の問題もあります。

1. 卒業生の日本語能力が低く、教育にかかる時間数の不足が明らかであるのに、教育省により日本語の授業数が減らされています。
2. 日本語教師の日本語能力、教えるスキルが不十分です。
3. 教師が担当する授業数が多い、自分の能力向上のため時間が確保できません。
4. 日本語教師は日本語以外に日本関連の他の科目も教えることになっています。
5. 研究が義務付けられていますが、そのための時間が不足しています。
6. 母語で作成された教材が不足しています。

3. まとめ

ウズベキスタンにおける日本語学習者数はここ数年急に増えています。その理由は日本で働きたい人が増えているからです。それに伴う日本語教師不足の問題を解決するには、ウズベキスタンの高等教育における問題、日本語教育が直面している課題について考えるべきで、そうでないと日本語教育の質の向上は難しいと思われます。

[参考文献]

瀬戸口達也 (2017) 「ウズベキスタンにおける日本語教育の現状と学習動機」『日本語教育論集 =Working papers in teaching Japanese as a foreign language』 26 号, pp9-16, 姫路獨協大学大学院言語教育研究科日本語教育コース.

小野正樹・ウマロヴァ ムノジャット・ハミドヴァ ナルギザ (2020) 「コロナ禍での日本語教育—ウズベキスタン国立世界言語大学の事例から考える—」『Philology Matters』, Vol. 2020: Iss. 4 , Article 14, pp 203-208. <https://uzjournals.edu.uz/philolm/vol2020/iss4/14/> (参照 2021-02-10)

和歌山大学における日本語教育の現状と課題 ーこれまでの取り組みと with コロナ、post コロナに向けてー

長友 文子（和歌山大学）

1. 和歌山大学の留学生

和歌山大学には、正規の学部留学生、大学院生の他、日本語日本文化研修留学生、交換留学生など、短期の非正規留学生が177名（2019年度）在籍している。

近年増加しているのは非正規の留学生で、2019年には、全留学生の40%を越えている。中でも目立って多くなっているのは、現在、16か国43の協定大学からの交換留学生である。

2. 和歌山大学の日本語教育

日本に来る留学生は、1883年に政府が「留学生30万人計画」をスタートさせてから少しずつ増え、2003年に10万人という目標を越えた。和歌山大学でも留学生は1990年代から増えていったが、当時の留学生は、基本的に正規の学部留学生であった。そのほとんどを占める私費留学生は、日本留学試験、日本語能力試験と大学の入試を受けて入学するので、入学時点で、科目履修に問題ないレベルの日本語力をもっていた。大学での日本語教育は、そういったレベルの高い留学生を、さらに専門文献を読み卒業研究をして論文を書けるまでにレベルアップさせるという、アカデミック日本語が中心であった。

しかし2000年代に入ると、全国的な大学の国際化により様子が変わる。本学でも協定校を増やし、留学生受け入れに力を入れるようになった。全学機関として「国際教育研究センター」が設置され、留学生の受け入れ派遣や日本語教育、生活支援などの担当する他、国際シンポジウムや短期研修の受け入れなどの事業を行った。日本語教育についても、科目を多様化させて対応した他、和歌山大学独自の日本語教材を発行して、和歌山に来る前に留学生に送付し、活用してもらったり、夏季・冬季文化講座を開いたり、また、短期の「日本語教員養成講座」を開講して修了した市民にボランティアで留学生の日本語を支援してもらうなど様々な工夫をした。

2010年代に入ると、留学生の人数が多くなるだけでなく、留学目的、学習ニーズ、日本語レベルの多様化がさらに進む。協定大学の日本語学科から来る交換留学生のように、日本語レベルが高く日本語研究や日本語教育法のニーズをもつ留学生もいる。正規留学生は、卒業後に日本企業に就職を希望するために、ビジネス日本語のニーズをもつ留学生もいる。

さらに、日本のサブカルチャーへの世界的な関心の高まりを受けて、本学でも「日本文化」に関心を持つ交換留学生が増加し、また日本語日本文化研修留学生も一定数来るようになる。日本文化に関心をもって日本に短期留学した交換留学生は、日本語レベルが低いことも多い。そこで、特任教員を迎えて、日本文化についての科目を充実させることにした。日本語のレベルが高くなく、日本文化についての専門講義は受けられなくても、華道、茶道、書道、日本食、着物着付け、つまみ細工、篆刻、墨絵など、自国では体験できない授業には、大変興味を持って参加できる。

また、学外の専門家を招いて文化体験講座やワークショップなども開いた。

さらに、地域と連携しながら、教室の外で多くの人と話すことで、生きた日本語が身につくように、伝統的な「和歌祭り」に歴史研究を踏まえて「唐人連」を復活させたり、地域の活性化や観光促進に向けて自治体や諸団体との共同研究事業で企画プレゼンテーションを行ったりなど、教室の外に出て日本語を使う活動や事業を実施してきた。

以上のように、交換留学生を中心とする留学生の増加と、日本語ニーズの多様化を受けて、様々な努力をしてきたが、1年前にコロナ禍という思いがけない事態が起こり、授業だけでなく課外の活動も従来通りにはできなくなった。それでも、日本人学生と留学生で地域のために「防災パンフレット」を作成したり、外国語を母語とする子どもたちとのオンライン交流事業も試みたが、何といても、コロナによって大きな問題に直面したのは、全ての授業がオンライン化に対応しなければならなかったことである。オンライン化の授業の実際については、松下先生から詳しくお話しして頂く。

3. まとめ

日本語教育にこれが絶対だという教授法はないし、逆に、これがないと絶対だめだという教授法もない。突然の新型コロナウイルスの感染拡大によって、日本語教育も大きな困難に直面したが、そこには、オンラインのメリットの発見もあった。オンラインで行った日研生の研究発表会に、ウズベキスタン世界経済外交大学のみなさんが参加して下さった。また、ウズベキスタンの学生さんたちに、オンラインの授業をさせて頂いた。授業はオンラインであるほかにいいというのはデメリットであるが、しかしオンラインには、国境を越えた学びも可能になるというメリットもある。コロナ時代を生き抜くことで、コロナ後に以前より充実した日本語教育への道が開けるであろう。

これまで日本語を学ぶ中で、地域の人たちに支えられ、また貢献する。そのような日本語教育を目指してきた。さらに、協定大学のみなさまと一緒に、世界と日本をつなぐ日本語教育を目指して、これからも＜何か＞ができればと願っている。

〔参考文献〕

- 長友文子（2007）「留学生の多様化と日本語教育の現状」『国際教育研究センター年報』和歌山大学際国際教育研究センター，第4号，53-62.
- 長友文子（2008）「大学の国際化と「留学生30万人計画」」『国際教育研究センター年報』和歌山大学際国際教育研究センター，第5号，67-80.
- 長友文子（2013）「地域の学びを通しての「日本事情」の試み」『国際教育研究センター年報』和歌山大学際国際教育研究センター，第10号，71-83.

オンライン授業におけるクラス活動の取り組み ーポストコロナ時代の日本語教育に向けてー

松下 恵子（和歌山大学）

1. 概要

和歌山大学における留学生向けの日本語授業は、日本語系科目と日本事情・日本文化系科目に大別される。2020年度は「日本語中級」「日本語上級」「日本事情」「日本文化入門」「ビジネス日本語」など25コースをオンラインで実施した。本報告では、報告者が担当したコースのクラス活動を取り上げ、ポストコロナ時代に向けたハイブリッド型授業やCOIL型（オンライン国際交流学习）を活用した日本語教育の可能性を考える。

2. 事例報告

1) 日本語系科目

「日本語中級」「日本語上級」では、他者と意見交換をしたりしながら自分の考えを表現し、様々な活動を通して日本語の運用能力を高め、日本社会や文化について考えを深めることを目的としているため、オンライン授業においてもクラス活動の内容を工夫した。反転授業を取り入れ、事前に教科書の内容について学ばせておき、オンライン授業では様々なWebリソースを組み合わせで発展活動を行った。

Zoomブレイクアウトルーム機能やTeamsを使ったグループワークやペア会話練習を実施し、また、スピーチコンテストなどの大学のイベントに合わせて審査員のロールプレイを行うなど、日々の学生生活と関連づけた活動を行った。また、課題については、文法や語彙のプリントやレポート課題だけでなく、自分の考えを述べたり、物語を紹介するなどの音声ファイル形式の課題も出した。読解活動では、メディア・リテラシー能力の向上を目指し、同じトピックのニュースについて、テレビニュース、新聞、コラム記事といった異なる媒体を読み比べ、主体的・批判的にメディアを分析し、自分の意見を書くといった活動を行った。

2) 日本文化系科目

「日本文化入門」では、幅広いテーマから日本文化について学び、自国の文化との比較を通して日本文化を理解することを目的としており、書道、茶道、伝統芸能（能・歌舞伎・狂言）、服装史、宗教、日本美術などを扱った。トピックの選択や学習方法について学生自身に決めさせ、自律学習ができるようにした。また、書道や着付けなどの体験授業を行うことができないため、文献資料やWebサイトを活用しながら芸術鑑賞を中心に行った。

オンライン授業は、Zoomブレイクアウトルーム機能を使ったグループワークを中心に構成し、各グループでトピックを決めて調査し、1枚のパワーポイントにまとめて発表することなどを行った。課題については、レポート課題のほかに、古典文学の朗読や3分間プレゼンテーション動画など、音声や動画形式の課題も出した。

3) 評価活動

小テストや最終課題に合わせて評価活動（自己評価／他者評価）を取り入れた。会話テスト動画や課題レポート、プレゼンテーション動画などについて、全員分のルーブリック評価シートを使って評価を行うものである。クラスメイトのパフォーマンスを評価することによって学生自身の振り返りや改善点を考えるなど、ピア・レスポンス活動につながった。

4) 日本語教育に関するイベント

国際連携部門の主催する「留学生の作文コンクール」「日本語スピーチコンテスト」などのイベントをオンラインで実施した。スピーチコンテストは、国内や母国にいる本学や和歌山県内他機関の留学生だけでなく、海外協定校の学生など 15 名が参加し、当日は 100 名を超える視聴者が集まった。

海外との交流イベントとしては、「和大生とウズベキスタン学生との Zoom 交流会」「2020 年夏ウズベキスタン日本語教育セミナー」「観光ガイド向け日本語・日本文化コースー日本からみたウズベキスタン ウズベキスタンからみた日本ー」「和大生とスリランカ学生との Zoom 交流会」などを長友先生主導のもと実施した。

3. まとめ

コロナ禍のオンライン授業には制約もあるが、インターネット環境さえあれば場所を問わず参加できるというメリットは非常に大きい。本学の日本語コースにもコロナの影響で母国から受講する学生が半数程度いたが、全員がオンラインで集い、クラス活動を行ったり、大学イベントなどに一緒に参加したりすることの大切さを実感した。

今回のコロナ禍で学んだことは、主体性や自律学習を学生に意識させることの重要性である。そのためには、様々なクラス活動やリソースを教師が提供し、参加者同士が協働的に学び合うことのできる場を作ることが必要である。そして、活動内容を日々の学生生活と関連を持たせることで、学生が日本語の授業を和歌山大学の留学生生活を充実させるための手段として捉えることにつながるであろう。また、オンラインを活用し様々な活動を行うことで、海外協定校や他機関との協働を活性化することができるのではないだろうか。

シンポジウム後半のパルディスカッションでは、オンライン授業のメリット・デメリットを理解したうえで、その特徴を活かしたハイブリッド型授業や COIL 型活動の可能性についてパネリストの先生方とともに検討したい。

[参考 WEB サイト]

「Google Arts & Culture」Google LLC, <https://artsandculture.google.com/?hl=ja>

「おはなしのくにクラシック」NHK for School, <https://www.nhk.or.jp/school/kokugo/classic/>

「JFS B2 教材 日本語で会議」国際交流基金, <https://www.jpf.go.jp/j/project/japanese/teach/tsushin/news/201809.html>

「JFS 読解活動集 B1 シリーズ」みんなの教材サイト国際交流基金, <https://minnanokyoza.jp/>

(すべて参照 2021-02-10)

パネルディスカッション

日時：2021年3月5日（金）16：15-16：45

5 大学における日本語教育—現状と課題—

■趣旨：

パネルディスカッションでは、post コロナの日本語教育のあり方をアジアにおける協定大学の先生方と共に話し合い、日本語教育の未来を見通すことができればと願っています。

今回パネリストとして参加して頂いたのは、協定校である4大学の先生方です。ベトナムのホーチミン市師範大学は、2007年に和歌山大学と協定を結び、2009年から交換留学生をお送り頂いています。インドネシアのビヌス大学は、2017年に協定を結び、2018年から交換留学生が来ています。2018年に協定を結んだ中国の鄭州大学からは、2018年と2019年に多数の交換留学生を受け入れました。ウズベキスタンの国立世界言語大学とは2020年に協定を結んだばかりですが、昨年の本学における日本語スピーチコンテストにゲストスピーカーとして学生が参加して下さいました。

パネリストの先生方やオンラインで参加して下さっている皆様方とともに、with コロナの今を乗り越え post コロナに向かう、留学生の学びのニュースタンダードを作ってゆければと願っています。

■議題：

—ハイブリッド型授業の可能性について

オンライン授業と対面授業のメリット・デメリットを踏まえた上で、それぞれの特徴を活かしつつ、どのようなハイブリッド型授業を行うことができるか。

—COIL 型活動（オンライン国際交流学習）の可能性について

ICT ツールを活かしながら協定校同士でどのような国際交流／学術交流ができるか。

■パネリスト：

ブイ フン ギー リン（ホーチミン市師範大学 日本語学部 副学部長）

ウタリ ノベラ（ビヌス大学 人文学部 日本語学科）

段 帆（鄭州大学 日本語学科 准教授）

イブラギモヴァ マリカ（ウズベキスタン国立世界言語大学 日本語学科 上級教師）

長友 文子（和歌山大学 国際連携部門 教授）

■モデレーター：

松下 恵子（和歌山大学 国際連携部門 特任助教）

基調講演 Q&A:伊東先生の回答

【Q1】日本語教育推進法が施行されましたが、和歌山県において何らかの施策が策定されたということも聞いていませんが、他府県では施策が策定、さらに実施されているところはあるのでしょうか。また、同法に定められた日本語教育推進会議の進捗状況はいかがでしょう。(匿名)

回答:日本語教育の推進にかかわる法律ができたことにより、各自治体では日本語教育の取り組み、具体的には地域日本語教室の開設など考えているようです。ただ目立った形で進行していないので、具体的な実践例は申し上げられない状況です。外務省のHPをご覧くださいと、これまでの経緯についてご理解いただけます。https://www.mofa.go.jp/mofaj/p_pd/ca_opr/page23_003065.html

【Q2】他機関や協定校とどのように Can-do Statements の整合性を図っていくのでしょうか？具体的な事例などはありますか？(匿名)

【Q3】日本語学習の目的が大学ごとに異なっているということがあるかと思いますが、共通する Can-do statements を作って行けるのでしょうか。(匿名)

回答:過去に私が勤務していた国立大学と香港にある協定校とで Can-do のすりあわせを行いました。また、問題点を共有して啓蒙活動をおこないました。共通の Can-do statements を開発するのはむずかしいですが、各大学の Can-do statements を比較・対照するだけでも意味のあることで成果はあります。

【Q4】アーティキュレーションの構築のために、各日本語教師として準備すべきこと、意識すべきこととはどのようなものがありますか？(匿名)

回答:学習者の日本語能力レベルを可能な限り把握することによって、アーティキュレーションのためのカリキュラムや体制の整備に取り組むことができます。まずは自分たちの日本語プログラムのルーブリックの整備 (Can-do statements の構築) をされたらどうでしょうか。

【Q5】日本語検定 JLPT には、スピーキングがないという問題はどうお考えでしょう？スピーキングを日本語検定に導入も考えてますか？(F.K.さん)

回答:試験があるから勉強意欲も出て頑張れますね。JLPT にスピーキングが導入されれば、学習者ももっと勉強するでしょう。私たちも JLPT のスピーキングテストの導入を願っていますが、まだ具体的な動きはありません。

【Q5】今から10年ほど前に国際交流基金が中心となって、国際的なアーティキュレーション・プロジェクトが確か4年間？にわたって、世界4エリアで？実施されたと思います。その成果はどうなったのでしょうか？(N.K.さん)

回答:あのプロジェクト(J-GAP)に参加した大学間ではそれなりの取り組みを行って、アーティキュレーションのための議論が活発に行われたようです。しかし、現在はどうなっているかわかりません。

【Q6】現在は都会だけではなく、地方に留学する日本語学習者が増加しつつあると思いますが、日本語学習者は地域の人と交流するとき、地域方言と直面することが十分あり得るのではないかと考えています。今後は can-do のような「地域で何ができる」のようなカリキュラムを利用し、日本穂教育への方言の導入は必要になってくるのでしょうか。(B.M.さん)

回答:「方言」の扱い方はむずかしいですね。教室ではやはり「標準語」の指導が中心になるのではないのでしょうか。日本文化のひとつとしての「方言」を取り上げるのは意味のあることかもしれません。「方言」には興味をもつ学生もいますから、ニーズを把握した上で導入されたらどうでしょうか。

パネルディスカッション Q&A の回答

【Q1】外国語の本の教材が現地では少ない。特に、教材が古い場合今では使われない用法とかがある。こういう場合の対処はどうしていますか？(F.K.さん)

回答: 本学の場合はできるだけオンラインで日本のサイトで教科書を購入しました。教材を古い場合は、必ず他の教材が必要です。そのため、授業のときに1つの教材だけでなく、他の教材も使用しています。また、インターネットで、各テーマに関しての最新の情報を検討します。(ビヌス大学／ウタリ先生)

回答: 今はインターネットの時代ですので、多くの情報がネットを通して検索できるようになりました。教科書があっても、中に載っていない内容がありますので、ネットを利用して、検索をすればよろしいです。私の場合では、よくネットで日本語の表現とか語彙の使い分けなどを検索するのです。(鄭州大学／段先生)

回答: 外国語の本の教材は現地で足りないの、古い教材があっても使う人がいますので、図書館においてあります。(国立世界言語大学／マリカ先生)

【Q2】オンライン授業で使った ZOOM 等の活用方法はどのようにして身につけたのでしょうか。大学で講習の機会はあったのでしょうか。(匿名)

回答: はい、そうです。本学において教師及び学生のために zoom などのアプリの使用についての講習があります。必ず講習を取らなければなりません。(ビヌス大学／ウタリ先生)

回答: オンライン授業で使ったツールの活用方法は一番最初は大学でそれについての講習があったのです。まだ分からなかったら、教師間でお互いにオンライン授業を試してみて、お互いに習いあいます。そして、技術者がいるグループチャットもできますので、そこにメッセージを送れば、分かる人がすぐ答えてくれます。自分の経験では、教師同士で一緒にツールの活用方法を習いあってこそ、早く身につけられるのです。(鄭州大学／段先生)

回答: オンライン授業で使った ZOOM 等の活用方法は自分たち使用しながら身につけるしかありませんでした。大学では講習などはありませんでした。(国立世界言語大学／マリカ先生)

回答: 大学全体としての講習会はありませんでしたが、学部単位や各部署での簡単な説明会はありました。(和歌山大学／長友先生)

回答: Zoom の使い方については、インターネットを検索して学んだり、Zoom 主催の無料セミナーに参加したりして使い方を学びました。(和歌山大学／松下先生)

【Q3】海外の各大学の先生にお聞きできますでしょうか。「①卒業生の進路先はどんなところか。」「②進路先から人材育成についてはどんな要請があるか。」アフリカでの日本語教育に携わっており、この2点が機関の課題に関わっています。みなさまのご機関も含め、日本国外の日本語教育を行う機関では重要課題になるかもしれません。上記2点お教えいただければありがたく存じます。(Y.Y.さん)

回答:①本学の学生の進路先は、卒業してからほとんど会社につとめます。インドネシアにある日本の会社に勤めるのが一番多いです。本学においては同窓会の関係が強いです。卒業生が同窓会に入って、色々な仕事の情報が得られます。②要請としては日本の会社の場合、JLPTを合格しなければなりません。ポジションによってJLPTのレベルも変わります。JLPTN1とTOEFL合格卒業生は良い仕事良い給料をもらえます。しかし日本企業以外はTOEFLのほうが必要です。(ビヌス大学／ウタリ先生)

回答:本学では、卒業生は大学院への進学以外、就職は公務員のほか、中国東南沿海の上海あたりとか北京などへ就職に行く学生が多いです。大都市には日系会社や合弁会社が多いのですから。また、高校へ日本語の教師をする学生もいます。進路先にとっては、卒業生の言語力はもちろん、明るくて、向上心のある人、行動力を持っており、団体意識がある人が一番望ましいです。そのために、大学では、知識だけでなく、学生の素質、能力を養成することにも取り組むべきです。(鄭州大学／段先生)

回答:①ウズベキスタンではまだ日本語を使う仕事は少ないです。日本企業などはウズベキスタンの市場に参入していません。日本語を使う仕事は日本語教師、ガイドぐらいです。②進路先から人材育成については特に要請がありません。(国立世界言語大学／マリカ先生)

【Q4】今日は、それぞれの国の取り組みを知ることができ、ありがとうございました。オンライン授業・対面授業、それぞれのメリット・デメリットはわかりましたが、それらを組み合わせたいいわゆる「ハイブリッド授業」をどう実施していくかを聞きたかったです。4月からの留学生の来日が五月雨式になるかもしれない状況で、どのような取り組みができるでしょうか。示唆をいただければ幸いです。(I.T.さん)

回答:実は本学においてハイブリッド授業を行ったことがありません。しかし分散型授業という1つのハイブリッド授業のパターンをパンデミックの状況を見ながら行う予定があります。来日の留学生に対して分散型授業を与えるのが良いかと思います。対面授業の時間もあるし、半分のオフラインの学生にとっても予習する時間もあります。語学を勉強する学生にとっては効果的だと思います。(ビヌス大学／ウタリ先生)

回答:ハイブリッド型授業の場合では、講義に出た単語、連語、文法、文型などについての説明は省略し、それらを前もってPPTに作り上げまして、学生に予習してもらいます。対面授業となりますと、学生からの質問に答えたり、単語、文法の項目についての練習をしてもらったりします。これで、学生とのやり取りの中で、学生の理解と習得上の問題点が発見でき、さらにその対応策を立てることができます。つまり、対面授業では、教師の一方的な教え込みを減少し、学生の運用力の向上に力を入れます。要するに、学

生が自分でやれることはできるだけ下でやってもらい、やれないことは対面授業の時それを中心にして進めていきます。このように、教師が説明する時間を短縮してできた時間は学生の練習時間に利用することができます。(鄭州大学／段先生)

回答:「ハイブリッド授業」の経験はありませんが、文法/新出語彙/漢字の導入、聴解の授業をオンラインで実施し、文法/新出語彙/漢字の練習、会話、読解、作文は対面授業で組み合わせる方法がいいと思います。(国立世界言語大学／マリカ先生)

回答:4月から入国できない交換留学生と既に和歌山にいる留学生が同時に授業を受けます。和歌山にいる学生が大学で授業を受ける場合、教室で1台のPCを使って、海外の学生とオンラインでつなげ、zoomで授業を進めてゆく予定です。また、これまでと同様、zoomやteamsでの授業も行っていく予定です。学生たちはオンライン授業に慣れているので、反転授業を取り入れた効果的な授業を展開してゆきたいと思います。(和歌山大学／長友先生)

回答:ハイブリッド授業(対面授業の中にオンラインで学生が参加する)の形としていくつかの方法があると思います。大型スクリーンや高価な機材等を使ったものはなかなか実施が難しいですが、普段使用しているノートPCやスクリーンを使った簡単なものであれば、対面授業の中にオンラインで学生が参加することに関してはできると思います。まずは、自分のできる範囲で小規模なことから始めてみて、「できる活動」「できない活動」を確認することが必要だと思います。そのうえで、「できる活動」を増やしていくことを目指したいと思います。(和歌山大学／松下)

イベント実施報告

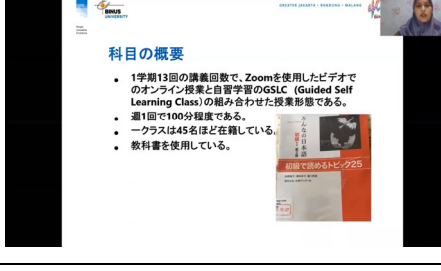
2021 年 3 月 5 日（金）、和歌山大学グローバル化推進機構グローバル化推進部（WU International）では、Wakayama University Symposium Series と題した国際シンポジウムの記念すべき第 1 回目を開催しました。

テーマは、「アジアにおける日本語教育一現状と課題」。国内外から日本語教師がオンラインで集い、基調講演、事例報告、そしてパネル・ディスカッションを通じて、それぞれの課題を共有するとともに、相互理解を深めました。また、ハイブリッド型授業の可能性を主な議題とし、コロナ禍における日本語教育の在り方について、活発な議論が行われました。

今回のシンポジウムには、世界 14 か国から 196 名の視聴者が参加し、多くの質問が寄せられるなど、大盛況のうちに幕を閉じました。ご参加いただいた皆様に、心より感謝申し上げます。

なお、時間の都合によりシンポジウムの中で答えられなかった質問への回答、事例報告の動画を期間限定で公開しており、以下のイベントページからご覧いただけます。

URL： <https://www.wakayama-u.ac.jp/ird/news/2021020300060/>

		
本学 伊東学長による開会挨拶	アジズ・アブドゥハキモフ シルクロード国際観光大学学長・ウズベキスタン副首相による来賓挨拶	国際教養大学 伊東祐郎教授による基調講演
		
事例報告の様子 1	事例報告の様子 2	事例報告の様子 3
		
パネル・ディスカッションの様子 1	パネル・ディスカッションの様子 2	本学クパニ副学長による閉会挨拶

和歌山大学国際シンポジウム 第1回準備委員会

大会準備委員	長友 文子	(国際連携部門 教授)
	藤山 一郎	(国際連携部門 准教授)
	松下 恵子	(国際連携部門 特任助教)
	長野 慎一	(留学生支援係職員)

事務局 国立大学法人 和歌山大学 研究グローバル化推進機構
グローバル化推進部 国際連携部門

表紙デザイン: 長野 慎一

編集・校正 : 松下 恵子

WU International 主催

Wakayama University Symposium Series

和歌山大学国際シンポジウム

第1回「アジアにおける日本語教育—現状と課題—」

要旨集

発行日 2021 年 3 月 5 日

発行者 国立大学法人 和歌山大学 研究グローバル化推進機構
グローバル化推進部 国際連携部門

〒640-8510 和歌山市栄谷 930 番地

Tel : 073-457-7524

Mail: kokusai@ml.wakayama-u.ac.jp



wakayama
univ.

国立大学法人

和歌山大学

